

早産とは妊娠 22 週から 37 週未満に赤ちゃんが生まれてしまうことをいいます。切迫早産とは妊娠 22 週以降 37 週未満に早産する可能性が高いことをいいます。妊娠 34 週未満に生まれると、体重が小さく身体の各臓器も未熟なので、赤ちゃんに負担をかけてしまいます。

早産の原因

早産は、膣や子宮の細菌感染がきっかけになることが少なくありません。何らかの原因で、膣の中の細菌が暴れ出し子宮の口元に感染が拡がると、様々な炎症物質が分泌されます。ある物質は子宮の頸管を軟らかくし、他のある物質は子宮の収縮（陣痛）を引き起こし早産が始まります。感染が子宮内の胎児を包んでいる卵膜に及び（絨毛羊膜炎といえます）と、卵膜は弱くなり破水が引き起こされてしまいます。

そして、毎日の生活習慣によって骨盤がゆるんだり、ゆがんだりすることにより全身の血液の流れが悪くなります。その結果、手足が冷えたり、むくみやすくなります。「冷える体質」になると、子宮の収縮が強くなり早産を招きやすくなります。

初期症状

- お腹が張る（石のように硬くなる、下腹部が締めつけられる、胸がキューンとなる）
- 出血、血液の混じったおりもの（おりものの増加）
- お水（羊水）が流れ出てくる
- トイレが近い（1 時間に何度もトイレに行くが尿は少量）

予 防

安静の基本は家の中で過ごすことです。具体的には、買い物や学校・幼稚園の送り迎え、洗濯干し、布団干しなどはできるだけ他の人に手伝ってもらいましょう。お腹に力のかかる動作や立ちっぱなし、散歩などは避けましょう。自宅安静中、少しでもお腹の張りや疲れを感じたら横になって体を休めたり、下半身をなるべく冷やさないようにしましょう。

妊娠中のセックスは、膣や子宮の細菌感染を増やすので感染予防の為にコンドームを使用しましょう。

また、専用のトコちゃんベルトで骨盤のゆるみを取り、早産を予防することができます。当院では、ベルトの装着指導なども行っております。

治 療

子宮の収縮を押さえるお薬（ウテメリンなど）を処方されることがあります。赤ちゃんを一日でもお腹の中で成長させるために、自己判断で休薬したりせず、処方された薬は正しく服用しましょう。

入院治療が必要な場合は、子宮の収縮を抑えるお薬を点滴します。感染症がある場合、抗生物質の内服や点滴が行われます。きちんと内服することで、細菌を退治します。それと同じく、消毒目的で膣洗浄が行われます。

いずれの場合も、これらのお薬が赤ちゃんに与える副作用や、催奇形性はありません。